

## 生きるにしても、死ぬにしても

ピリピ人への手紙 1 章 19-26 節

### はじめに

今日は、召天者記念礼拝です。昨年の召天者記念礼拝から今日までの間に、この教会では坂井宏明長老が天に召されて行きました。坂井長老は、1996年にこの教会に転入会され、1998年からは執事を務められました。そして2007年からは約十年間にわたって長老を務められました。しかしここ数年は、病のため長老職を休職され、闘病の末、今年の8月5日に天に召されました。64歳でした。

召天者記念礼拝は、先に天に召された方々を覚えつつ、主なる神様を礼拝する時です。また、先に亡くなられた方々はどこに行ったのか、私たちはやがてどこに行くのか、そして私たちは残された命をどのように生きるべきかを、改めて考える時でもあります。

今日は、1世紀に小アジアやヨーロッパにキリスト教を広めた使徒パウロの人生観や死生観から、私たちにとっての「生きること」また「死ぬこと」について考えたいと思います。

### 1. パウロの願い

今日の聖書箇所 20 節で、パウロはこう言っています。「**私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです**」。

パウロの願いは、「生きるにしても死ぬにしても」、自分を通して「キリストがあがめられること」でした。私たちの多くは、「生きるにしても死ぬにしても」、「自分があがめられること」を願うのではないのでしょうか。自分が人々に覚えられ、認められ、評価されることを願うのが、私たちではないのでしょうか。私たちは、そのためにこそ一生懸命生きているとも言えると思います。また私たちが死んだ時には、自分が人生で成し遂げたことを人々に覚えてほしい、認めてほしい、また自身の存在を忘れないでほしいと願うのではないのでしょうか。とにかく私たちは、「生きるにしても死ぬにしても」、「自分が大切」なのではないのでしょうか。

しかしパウロは、「生きるにしても死ぬにしても」、大切なのは「自分」ではなく、「キリスト」だったのです。自分が人々に覚えられ、認められ、評価されるよりも、イエス様が人々に覚えられ、信じられ、あがめられることを願ったのです。パウロの人生にとっては、自分よりもイエス様が大切であり、パウロの人生の主役は、自分ではなくイエス様だったとも言えると思います。

私たちは誰でも、自分の人生の主役は自分でありたいと願うのではないのでしょうか。自

分の人生においては、自分が生きた証を刻みたいと願うのではないのでしょうか。しかしパウロは、自分の人生の主演をイエス様に譲ったのです。自分が注目されるよりも、イエス様が注目されればそれでよい、自分は脇役でよい、自分が生きた証を刻むよりも、イエス様を証して生きたい、パウロはそう考えたのです。

## 2. パウロの人生観

だからこそパウロは、21 節でこのように言います。「**私にとって生きることはキリスト、死ぬことも益です**」。パウロにとって「生きることはキリスト」だと言うのです。パウロの人生を一言で言うなら、それは「キリスト」だと言うのです。パウロにとってイエス様は、人生そのものなのです。

というのは、パウロはガラテヤ人への手紙の中でこのように言っています。「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです**」(ガラテヤ 2:19-20)。

パウロは、自分はイエス様とともに十字架につけられたと言います。つまりパウロは、イエス様を信じた時に、自分は死んだのだと言うのです。イエス様を信じた時に、自分は死んで、自分の中にイエス様が生きるようになったと言うのです。

パウロは、イエス様を信じた時に、自分が人生の主演であることを止めたのです。そして、自分の人生の主演をイエス様に明け渡したのです。ですから、自分の人生は、「自分の欲望」に従って生きるのではなく、「イエス様の御言葉」に従って生きるようになったのです。そして「自分の夢や目標」に向かって生きるのではなく、「イエス様からの使命」に生きるようになったのです。

何がパウロをこのように変えたのでしょうか。それは「信仰」です。パウロを愛し、パウロのために十字架でご自分の命を与えてくださった、神の御子であるイエス様に対する「信仰」です。「信仰」こそが、パウロの人生そのものを変え、人生の主演を自分ではなくイエス様としていく生き方へと変えたのです。

## 3. パウロの死生観

信仰は、パウロの「生き方」だけでなく、「死」に対する考え方も変えました。パウロは、「死ぬことも益です」と言っています。パウロは死ぬことを恐れていません。パウロにとって死ぬことは、「よいこと」だったのです。パウロにとっては、「生きること」よりも「死ぬこと」のほうが「望ましいこと」だったのです。

23 節でパウロは、「**私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです**」と言っています。パウロがなぜ「生きること」よりも「死ぬこと」のほうを望んだのか、その理由は、「死ぬこと」は「世を去ってキリストとともにいること」だからです。

イエス様は今、天におられます。私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた後、天に昇って行かれました。イエス様は今も私たちと共にいてくださいます。しかし今は、信仰において、また聖霊を通して、私たちと共にいてくださるのです。

しかし私たちが地上の生涯を終えて、死を迎える時、私たちはイエス様がおられる天に迎えられ、あらゆる労苦から解放放たれて安らぐことができるのです（黙示録 14：13）。私たちの教会から先に天に召された方々も、今はイエス様とともにおられ、あらゆる労苦から解放されて、全き安らぎに包まれているのです。

#### 4. パウロの葛藤と決断

パウロにとって、「生きることはキリスト」であり、「死ぬことはキリストとともにいること」なのです。23 節でパウロは、「**私は、その二つのことの間で板ばさみになっています**」と言っています。パウロにとっては、「生きること」も「死ぬこと」も両方とも魅力的だったのです。どちらも魅力的だったので、パウロは 22 節で「**どちらを選んだらよいか、私には分かりません**」と言うのです。

私たちの多くは、「生きること」と「死ぬこと」のどちらか一つを選ぶのではないのでしょうか。「死ぬこと」が怖いから「生きる」、あるいは「生きること」が辛いから「死ぬ」というように、どちらかを否定して、一つを選ぼうとするのではないのでしょうか。しかしパウロは、「生きること」も魅力的であり、「死ぬこと」も魅力的だったのです。また逆に、「生きること」を恐れていなかったし、「死ぬこと」も恐れていなかったのです。パウロは、「生きること」も「死ぬこと」も、両方を喜んで選ぶことができたのです。

しかしパウロは、24-25 節でこのように言います。「**しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています**」。

パウロはこの手紙を書いた時、投獄されていました。ですからいつ処刑されるかわからない状況でした。しかしパウロは、このまま処刑されても構わないと考えていたのです。なぜならパウロにとって死ぬことは、「キリストとともにいること」だからです。パウロは自分のことだけを考えれば、「生きること」よりも「死ぬこと」のほうを望んでいたのです。しかしそれは、「生きること」が辛いからとか、「生きること」に疲れたからではなく、「死ぬことはキリストとともにいること」だからです。

しかしパウロは、「死ぬこと」よりも「生きること」を選んだのです。なぜなら自分が「生きること」は、ピリピ教会の人々の信仰の前進と喜びのためになると考えたからです。パウロは、自分のことだけを考えれば、「死ぬこと」を望みました。しかしパウロは、人々のことを考えて、「生きること」を選んだのです。パウロは決して、「死ぬこと」が怖いから「生きること」を選んだわけではありません。人々のために、「生きること」を選んだのです。

パウロにとって「生きること」は、決して自分のためではありませんでした。パウロに

とって「生きること」は、人々のためであり、人々がキリストをあがめるようになるためでした。

## **おわりに**

パウロにとって「生きることはキリスト」であり、「死ぬことはキリストとともにいること」でした。パウロは、「生きること」も「死ぬこと」も恐れませんでした。どちらをも喜んで選ぶことができました。

パウロをそのようにしたのは、イエス様に対する「信仰」です。イエス様に対する信仰が、パウロの「生き方」を変え、パウロの「死」の恐怖を取り除いたのです。イエス様に対する信仰は、私たちの人生観を変え、私たちの死生観を変えます。何を信じるかによって、私たちの「生き方」が変わり、「死」の考え方が変わるのです。

皆さんの信仰は、皆さんの人生にとってどのような意味を持っているでしょうか。また皆さんの信仰は、皆さんの「死」にとってどのような意味を持っているでしょうか。

皆さんの人生にとって、イエス様はどのような存在でしょうか。ある人は、イエス様は自分の人生にとってあまり意味のない方だと考えるでしょう。またある人は、イエス様は自分の人生の一部だと考えるでしょう。しかしパウロは、イエス様は自分の人生のすべてだと考えたのです。

パウロの願いは、「生きるにしても死ぬにしても」、自分を通して「キリストがあがめられること」だと言いました。この「あがめられる」という言葉は、「大きくなる」という意味の言葉です。パウロは、人々の中でイエス様の存在が大きくなることを願ったのです。自分のように、人生のすべてとなるぐらい、人々の人生にとってもイエス様の存在が大きくなってほしいと願ったのです。そしてそのためにパウロは、「どんな場合にも恥じることなく、大胆に」御言葉を語ったのです。

聖書の御言葉は、私たちに「信仰」を与えてくれます。そして聖書の御言葉を「信仰」を通して読む時、私たちの内でイエス様の存在が大きくなります。イエス様の存在が私たちの内で多くなる時、私たちの「生き方」が変わり、私たちの「死」の恐怖が取り除かれ、希望へと変えられていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはしばしば「生きること」に疲れ、「死ぬこと」を恐れます。私たちはそのどちらも選ぶことができないことがあります。しかしパウロは、「生きること」にも「死ぬこと」にも喜びを抱き、「生きること」も「死ぬこと」も恐れませんでした。それは、パウロにイエス様に対する「信仰」があったからでした。パウロにとって、イエス様の存在があまりにも大きかったからでした。どうか私たちに「信仰」を与えてくださって、私たちにとっても「信仰」が、「生きること」にも「死ぬこと」にも大きな力を持つものにしてください。私たちが信仰によって、「生きること」にも「死ぬこと」にも恐れることな

く、喜びと希望をもって歩めるようにしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。